

16 排泥管（ドレーン）

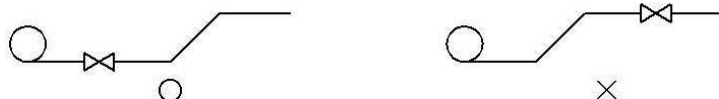
（1）目的

排泥設備は、管の布設時における夾雑物の排出、管内に発生した濁水などの排水および工事ならびに事故等非常時の管内水排水のため、管路の管末部および分岐部に設置する。

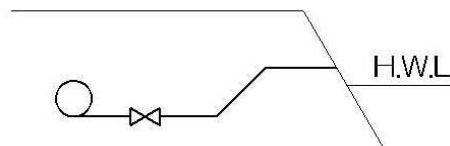
また、次の管布設工事時の断水を回避するため、管布設時に仮配管の取出口としても利用する。

1) 水路・河川排水タイプ

- ・水路または河川の付近に設置する場合は、河川管理者等との協議や占用許可をとること。
- ・排泥管付近の護岸は放流水によって、浸食または破壊されないよう堅固に築造する。
- ・排泥管には必ず仕切弁を設ける。また、空気が溜まらない配管とする。

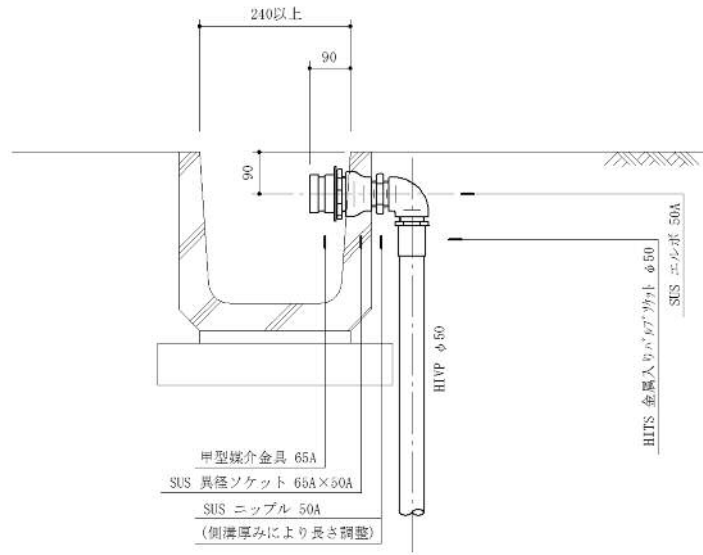


- ・排泥管からの吐出口は、水路などからの汚水の逆流を防止するため高水位（H.W.L）よりも高い位置に設ける。



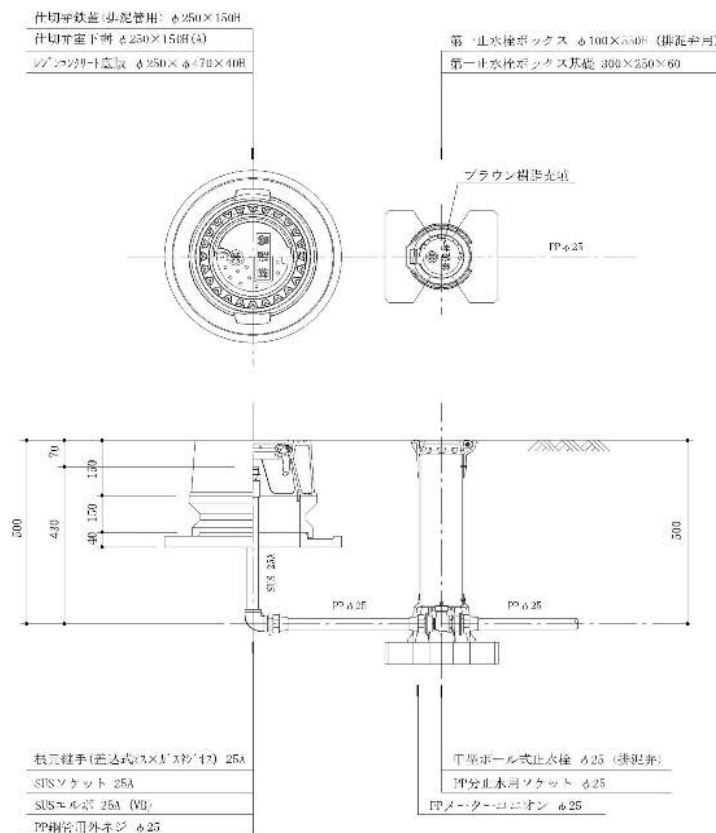
2) 側溝排水タイプ

- ・管布設時において、水質確認のための採水を目的とし設けるものとする。また断水回避のため、吐出口を仮配管起点として利用できる場所を選定する。
- ・ループ配管部については、断水区内の仕切弁を閉めた場合に管末となる箇所にて設ける。
- ・本管側の呼び径は50mm以上とする。
- ・排泥管の分岐呼び径は75mmとするが、本管が50mmの場合は50mmとする。
- ・分岐部から吐出口までの間に仕切弁を設置し、吐出口は原則として甲型媒介金具65Aとするが、設置できない場合にはHIVP(φ50mm)で施工してもよい。
- ・側溝等に設置する場合は、グレーチング構造で外部から状態確認しやすく流水断面を阻害しない箇所に設ける。



3) 止水栓埋設タイプ

本管呼び径 50mm 未満の配管に設ける場合や、近くに放水可能な側溝等が無い場合、緊急用に設置が必要となった場合には、止水栓埋設タイプを採用する。吐出口には、根元継手 25A を設置する。



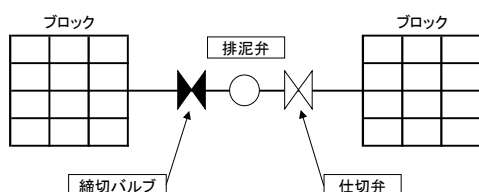
1.7 配水区締切バルブ

配水区締切バルブは、配水池系統にて分割し、配水量と水圧を配水区で管理するために整備したものである。しかし、配水区締切バルブは、何らかの理由で開やスキの状態になった場合、配水区の管理に支障を来すが、その状態を確認する方法がない。

よって、配水区締切バルブを設置する場合は、完全に締切バルブの開閉状態を確認できる構造にすると共に、事故時の配水区応援等で締切バルブを開にする場合の洗管用に以下の構造を原則とする。

なお、事故時の配水区応援等が必要ない小口径管の場合は、配水区締切バルブを設置せずに、配水区を完全に切り離れた方が配水区を管理する上で有効であるため、維持管理部門と協議して決定すること。

配水区締切バルブは、他の仕切弁と区別するため、鉄蓋をブラウンとする。



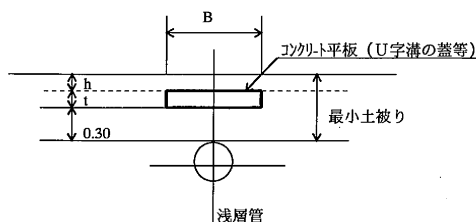
1.8 切管の最小長さ

GX・NS形継手の切管最小長さについては、「ダクタイトル鉄管管路の設計(JDPA T 57(T 35)切管の有効長の最小長さ」を参考とすること。

1.9 管の防護

水道管を道路占用基準（土被り）よりも浅く埋設する場合には、道路管理者と協議の上、対策を講ずること。以下に対策例を示すが、詳細については要協議とする。

(1) コンクリート平板による防護工（U字溝の蓋等）



- ① 最小土被り寸法は、舗装厚（ h ）＋コンクリート平板厚（ t ）＋30cmとする。
- ② 防護工の天端は、舗装厚以下とする。
- ③ 平板のB寸法は、管外径＋30cm以上とする。

20 水圧試験

工事完了後の水圧試験や充水作業が円滑に実施できるように、設計段階から排泥管位置、試験手順等の検討を十分に行っておく必要がある。

(1) 管路布設時の水圧試験

管路の布設が完了した際は水圧試験を実施し、漏水の有無を確認するため管路に充水し漏水音の無いことを確認の上、加圧ポンプにて1.0MPaまで加圧する。1週間から10日間は定期的に水圧監視を行い、残圧(1.0MPa)が減少している場合は再度1.0MPaまで加圧し残圧保持を確認する。

以上の準備ができた段階で0.75MPaで24時間の間、水圧を維持することが確認できれば合格とする。0.75MPaの水圧保持確認については自記録水圧計による計測を行い、記録用紙を完成図書として提出する。

また水圧試験については、宗像管工事協同組合等の試験設備を有する会社へ別途発注とする。

(2) 割丁字管の水圧試験

割丁字管の水圧試験は、穿孔作業前に割丁字部据付が完了した段階で実施する。鋳鉄管の場合は1.0MPaの水圧を5分間保持でき、目視による漏れがないことが確認できれば合格とする。